関ヶ原合戦を復元する

水野伍貴

慶長五年九月十五日
その日、何が起こったか!?

従来の関ヶ原史観を覆す近年の
「**新説**」はどこまで事実か？
信憑性の高い史料に基き
決戦当日の実像に迫る！

最新研究

関ヶ原合戦を復元する

水野伍貴

星海社

271

SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

本書は、関ヶ原合戦の布陣や経過など、決戦当日の様子を復元していくことをテーマとする。周知のとおり、関ヶ原合戦とは、慶長五年（一六〇〇）九月十五日、徳川家康率いる東軍が、石田三成をはじめとする西軍を破った戦いであり、日本史上、有名な戦いの一つに挙げられる。

なかでも、家康が家来に松尾山への一斉射撃を命じる場面は、合戦のクライマックスと言っていい。この一斉射撃は、『関原軍記大成』に「誘鉄炮」、『濃州関ヶ原合戦之聞書』には「とい鉄炮」、『日本戦史・関原役』では「誘導の銃」と記されており、小早川秀秋の寝返りを促す引き金として、合戦の転換点に位置づけられている。

ところが、東軍の最前線から松尾山まで約一・三㎞の距離があり、射撃を認識できないと考えられる点などから、一斉射撃によって小早川秀秋が寝返ったとする逸話は約四十年前から疑義が唱えられていた（藤本：一九八四）。そして、近年では白峰旬氏が、一斉射撃の

逸話は『井伊家慶長記』が初見であり、その内容は、藤堂高虎が秀秋の陣に空砲を打ち込み、秀秋が反撃して来ないのを見て、寝返りは疑いないと確信したという別の話であったと指摘し、さらに逸話の変遷を整理したことで、文献史学の面からも否定がおこなわれた（白峰：二〇一四）。

合戦の山場が否定されたことで関ヶ原合戦のイメージは大きく変わった。時代考証に力を入れた映像作品の中には、一斉射撃の逸話を外しているものもある。

関ヶ原合戦のイメージに影響を与える新説は、ほかにもある。その中で最もインパクトがあるのは、小早川秀秋が寝返ったのは開戦と同時で、合戦は瞬時に終わったとする説であろう（この説は本書の第六章でとりあげる）。

近年の新説を繋ぎ合わせていくと、関ヶ原合戦のイメージは、東軍が西軍を瞬時に破った一方的な殲滅戦という「つまらない」ものとなる。

だが、これには素朴な疑問がある。新説が謳うような一方的な殲滅戦であったならば、徳川政権にとって家康の武威を示す格好の材料となる。しかし、酒井忠勝の命によって林羅山・鵞峰父子が編纂した『関原始末記』（明暦二年〈一六五六〉成立）でさえ、一進一退の攻防が続いた後、秀秋の寝返りによって形勢が動いたとしている。何故わざわざ一方的な

殲滅戦であったものを接戦と偽る必要があるのであろうか。

本書では、近年の新説を検討してゆくとともに、比較的信憑性の高い史料を基にした考察によって、決戦当日の様子を復元していく。

本書における史料の扱い方について

一　史料の高下について

本書では、書状や日記、いわゆる一次史料を中心に進めていくが、必要に応じて二次史料も活用していく。活用する二次史料は、関ヶ原合戦に参戦した当事者の覚書、『寛永諸家系図伝』の編纂にあたって作成された覚書や、『寛永諸家系図伝』の記述が中心となる。『寛永諸家系図伝』は、大名・旗本約千四百余家の系図集である。寛永十八年（一六四一）に徳川家光の命によって編纂が開始され、同二十年に完成している。

系図という性格上、御家の顕彰というバイアスが掛かっている点は留意しなくてはならないが、諸将の布陣地を比定する上では、各家で作成された記録の方が、他者によって作られた史料よりも情報の精度は高いといえよう。

また、『寛永諸家系図伝』の編纂にあたって、水野勝成が寛永十八年五月付で覚書を幕府に提出しているように、関ヶ原合戦を経験した者の記憶が反映されている事例も少なく

ない。

関ヶ原合戦を経験した者が残っていた時期に、各家が当事者の記憶を集約して作成した史料や、それを基に成立した『寛永諸家系図伝』は、関ヶ原合戦の布陣を考察していく上で有益な史料といえる。

本稿では、①一次史料、②当事者の覚書、③『寛永諸家系図伝』の編纂にあたって作成された覚書、④『寛永諸家系図伝』、の順に史料の高下をつけて扱い、必要に応じて十六世紀中頃までに成立した軍記を補助として用いたい。

二　『関ヶ原御合戦双紙』の史料批判

次に『関ヶ原御合戦双紙』に対する本書の扱い方について述べたい。『関ヶ原御合戦双紙』は、『信長公記』の著者として有名な太田牛一が著した関ヶ原合戦の軍記である。山科言経の日記『言経卿記』によると、慶長六年（一六〇一）十二月七日に言経は家康の所で『関ヶ原御合戦双紙』を閲覧したとあるため、慶長六年十二月には『関ヶ原御合戦双紙』は概ね出来上がっていたと推測できる。成立の早さからいえば、その史料的価値は一

次史料に準じるように感じられる。しかし、くり返し増補されており、諸本によって成立年および内容が異なる点を留意しなくてはならない。

伝存する自筆本のうち、成立年がわかるのは、蓬左文庫所蔵の自筆本〈以下、蓬左文庫本と表記〉のみであり、奥書によって慶長十二年（一六〇七）の成立であることがわかる。

大和文華館も自筆本〈以下、大和文華館本と表記〉を所蔵しているが、成立年は不明である。しかし、蓬左文庫本が慶長十二年の平岩親吉の清須（愛知県清須市）入城までを記載しているのに対して、大和文華館本は慶長五年十月一日の石田三成の斬首で終えているため、成立は慶長十二年以前と考えられる。

天保十五年（一八四四）の写ではあるが、杤山斉氏所蔵本〈以下、杤山家本と表記〉も、慶長五年十月一日の石田三成の斬首で終えている。そして、大和文華館本と蓬左文庫本と比べて簡略で未整理な状態であり、二つの諸本とは異なる自筆本を模写したと考えられている（大澤：二〇〇九）。書写原本の成立年は不明である。

三つの諸本では、杤山家本の書写原本、大和文華館本、蓬左文庫本の順に成立したといえる。しかし、成立年が明確なのは、前述のとおり蓬左文庫本の慶長十二年のみであり、杤山家本の書写原本と、大和文華館本は、慶長十二年以前としかわからない。

しかし、たとえ慶長十二年であっても、関ヶ原合戦から七年しか経過しておらず、史料的価値は高い。だが、『関ヶ原御合戦双紙』の問題は増補にある。太田牛一は、旗本・坪内利定に宛てた書状において、利定の息子四人の名を『関ヶ原御合戦双紙』に書き加えたと述べている（『坪内文書』）。

大和文華館本では、小坂雄長、安孫子善十郎、稲熊市左衛門、兼松正吉が功名を立てたと記されている。だが、蓬左文庫本になると、兼松正吉の後に「坪内喜太郎（利定）、子共四人、宗兵衛（家定）・可兵衛（定吉）・佐左衛門（正定）・太郎兵衛（安定）、谷理右衛門」が追記されている。

太田牛一が坪内利定に宛てた書状から、利定の息子四人は利定の要望によって追加されたと判断できる。おそらく、利定の名も本人の要望で追加されたと思われ、谷理右衛門も同様の経緯（本人の要望）で加えられたと推測できる。なお、管見の限りでは谷理右衛門が如何なる人物か不明である。

後年、小折（愛知県江南市）領主・生駒利豊は、坪内定次（家定の子）へ宛てた返書において関ヶ原合戦の様子を語っている（『生駒陸彦氏所蔵文書』）。文中に小坂雄長、安孫子善十郎、稲熊市左衛門、兼松正吉の名はみえるが、坪内利定と息子四人、谷理右衛門の名は

ない。

理由として、生駒利豊や小坂雄長らは尾張衆であり、福島正則に属して宇喜多秀家と交戦しているが、徳川家臣の坪内利定は、井伊直政に属して戦っており、戦った場所が異なるためと考えられる。

『関ヶ原御合戦双紙』の記述についても、本来、福島隊に属した尾張衆の活躍を述べた件であったと思われるが、利定の要望によって別の場所で戦っていた利定父子が加えられたと推測できる。利定の息子四人の戦功は、それぞれ首級一つであり、（尾張衆の活躍のように一区域に限定した記述ならばともかく）戦場全体でみれば特筆する戦果ではない。

牛一の加筆は、客観性を欠いたものといえる。それ故か、林羅山・鵞峰父子が編纂した『関原始末記』（明暦二年〈一六五六〉成立）では、（息子四人は省かれ）利定のみが記されている。

太田牛一は坪内利定宛ての書状で、利定の息子四人の名を加えた『関ヶ原御合戦双紙』を利定に渡したいが、他所から書写の要望を受けて貸し出していると述べている。『言経卿記』にも話題に上っているように、『関ヶ原御合戦双紙』は周囲の関心を引いていたといえる。ゆえに坪内利定は自家の勲功を喧伝するために、息子四人の名を加えるように要望し

たのであろう。利定と同様の行動をとった者が他にもいたことは、想像に難くない。

家譜や家記などの史料は、御家の顕彰というバイアスが掛かっているが、基本的には作成者側にしか掛かっていないため、留意すべき点が分かりやすい。一方で『関ヶ原御合戦双紙』は、御家の顕彰という動きが多面的におこなわれているため、全体に注意を払わなくてはならない。

『関ヶ原御合戦双紙』は早期に成立したとはいえ、あくまで二次史料（軍記）である。二次史料は、情報を精査した上で編纂がおこなわれ、更新される度に精度を増していくのが望ましい。

しかし『関ヶ原御合戦双紙』は、大和文華館本では、関ヶ原合戦で黒田長政、加藤嘉明（茂勝）、細川（長岡）忠興が北国脇往還を攻め上ったとするが、蓬左文庫本になると三名は、福島正則や井伊直政らとともに東山道（中山道）を攻め上ったとされている。第四章で述べるように大和文華館本の方が正しい。

また、朽山家本では大垣城（岐阜県大垣市）の攻城軍には水野勝成のみが記され、勝成が相良頼房（長毎）から垣見一直らの首を受け取った日にちは、九月十七日と正確に記されている。しかし、大和文華館本と蓬左文庫本は九月十六日となっており、更新によって誤

った方へ向かっている。そして、大和文華館本と蓬左文庫本では、攻城軍に水野勝成と共に津軽為信の名を記すが、勝成と両頭で動いていたのは松平（戸田）康長であるほか、大垣城攻めに参戦した大名家の史料からは津軽為信の名を確認できない。津軽為信が攻城軍にいたとしても、領国である陸奥堀越（青森県弘前市）からの出陣とは考え難いため、備（部隊）を構成できるほどの軍勢を率いていたか疑問である。松平康長を差し置いて津軽為信が記されている点もまた、客観性を欠いた加筆といえる。

『関ヶ原御合戦双紙』が、更新によって誤った方へ向かう可能性を含んでいるのは、坪内利定の事例にみられるように、内容に介入する者の存在が大きく作用していよう。よって、三つの諸本の信憑性の高下は、他者の介入を受けていないほど高くなり、杤山家本、次いで大和文華館本、蓬左文庫本の順となる。

本書で『関ヶ原御合戦双紙』の記述を扱う際は、成立の早さを過信せず、他の史料と照合しながら慎重に扱っていく。また、扱う際は基本的に杤山家本の記述を用いるが、大和文華館本や蓬左文庫本の記述を用いる際は、『関ヶ原御合戦双紙（大和文華館本）』、『関ヶ原御合戦双紙（蓬左文庫本）』と表記する。

凡例

一、本書における史料の引用は、読みやすさを考慮して基本的に現代語訳にしている。ただし、原文のほうが伝わりやすいと思われるものについては読み下し文で引用している。また、イエズス会の史料の日本語訳は、松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期第3巻（同朋舎出版、一九八八年）から引用している。

一、本書での人名・地名の表記は、著名な名称で統一した。

一、本文に組み込まれた参考文献の表記は、煩雑さを避けるため略称を用いている。この内、『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第一集（岐阜県教育委員会、二〇〇二年）は、（岐教：二〇〇二）と表記している。

一、典拠となる史料の名称は省略せず表記しているが、『寛永諸家系図伝』は『寛永伝』と表記している。

目次

はじめに 3
本書における史料の扱い方について 6
凡例 13
序章 通説を振り返る 17
第一章 関ヶ原合戦に至る経緯 29
第二章 西軍の関ヶ原転進 57
第三章 西軍の関ヶ原転進は小早川秀秋の寝返りに対処するため」とする説の検討 73

第四章　布陣地の考察　93
第五章　「玉城は豊臣秀頼を迎えるための本陣」とする説の検討　129
第六章　「小早川秀秋の寝返りは開戦と同時」とする説の検討　141
第七章　合戦の経過を検討する　153
終章　慶長五年九月十五日関ヶ原合戦の復元　179
主要参考文献　198
おわりに　203

図版作成／ジェオ

序章

通説を振り返る

一　関ヶ原合戦の経過

まずは、通説となっている関ヶ原合戦の経過をみていきたい。なぜ、通説について触れる必要があるかを述べると、近年の関ヶ原合戦に関連した書籍を見渡した時、通説のみを丁寧に解説した書籍は、まず見当たらないからである。二十年ほど前であれば、通説のみを載せた書籍で溢(あふ)れていたが、今では何かしら新説が盛り込まれている。近年では純粋に通説のみに触れられる機会が少なくなっているにもかかわらず、読者全員が認識する「通説」が同じであると決めつけて話を進めていくわけにはいかないからである。

では、次に「通説」の基準をどこに置くかという問題がある。学校で使用される教科書に関ヶ原合戦の経過が掲載されていればよいが、そのようなことはない。公的なものに依拠すれば、明治二十六年（一八九三）に刊行された参謀本部編纂『日本戦史(にほんせんし)・関原役(せきがはらえき)』〈以下『日本戦史』と表記〉になるであろう。

ここで「（年数を）遡(さかのぼ)りすぎではないか」と感じられた方は多いに違いない。しかし、新説で溢れるようになったのは、十年ほど前からであり、それまでは『日本戦史』の内容が

普通に使われていたのである。そして、近年にみられる新説はあくまで「新説」であって「定説」や「通説」となったわけではない。『日本戦史』の内容を通説とするのは妥当と思われる。

よって『日本戦史』をベースに、解説を加えながら戦闘の経過（通説）をみていくことにしたい。もっとも、関ヶ原合戦に詳しい方には本章は退屈と思われる。こうした方は本章を飛ばしていただいて構わない。また、本章は筆者の見解を述べているのではなく、通説の紹介であるため、本章で述べたことを次章以降で否定することは多々ある。あらかじめ承知いただきたい。

二　両軍、関ヶ原へ

慶長五年（一六〇〇）九月十四日午後五時頃、美濃国赤坂（岐阜県大垣市赤坂町）に本陣を構える徳川家康は、敵情を探らせていた間諜から報告を受けていた。

そして諸隊に「大垣城（大垣市郭町）の敵は出て戦わぬ。いくらかの兵を残してこれに備え、本軍は明日出発。ただちに佐和山城（滋賀県彦根市）を攻め落とし、大坂に向かうぞ」

と命じた。そして、この情報を大垣城へ流した。

大垣城に籠る石田三成は、「敵を直接大坂に向かわせるのは上策ではない。ここを出て関ヶ原で待ち受け、決戦しよう」と言い、衆議一決して大垣城を出陣した。城には福原長堯（直高）以下七将、七千五百の兵を残し、そのほかは牧田（大垣市上石津町）を経由して関ヶ原へ向かった。

『日本戦史』は、家康が率いる軍を「東軍」、三成らの軍を「西軍」と呼称している。当然ながら、当時そのように呼ばれていたわけではなく、便宜上の呼称である。

一般的には「徳川」対「豊臣」のイメージが強いが、家康も豊臣秀頼への奉公を掲げており、両軍が「豊臣」軍を称した戦いであった。本来、関ヶ原合戦は豊臣政権の内部抗争にすぎず、天下人を決める戦いではなかったのである。大まかに述べるならば、家康の豊臣政権での執政を支持する側と、反家康派の戦いである。よって、本書も便宜上、家康らを「東軍」、三成らを「西軍」と呼称したい。

九月十四日午後七時、大雨のなか、密かに大垣城を出発した西軍は、翌十五日の午前一時に石田三成が小関（関ヶ原町関ヶ原）に陣取って北国脇往還を押さえ、笹尾に本陣を置いた。

島津惟新（義弘）は午前四時に到着し、小池（関ケ原町関ケ原）に布陣。その前方に甥の島津豊久（忠豊）が陣取り、石田隊と島津勢で北国脇往還を挟んだ。

続いて到着した小西行長は、梨木川（寺谷川）を前に、北天満山を背にして布陣。最後に到着した宇喜多秀家は兵を前隊と本隊に分けて南天満山の前に布陣した。

このほか、山中（関ケ原町山中）の高地に布陣していた大谷吉継は、関ヶ原での迎撃作戦を受けて進軍し、藤古川（関の藤川）を前にして陣取った。脇坂安治、小川祐忠、朽木元綱、赤座直保は、大谷隊と東山道（中山道）を挟む形で布陣している。

また、城として整備された松尾山には、小早川秀秋が入っていた。そして、南宮山一帯には、毛利秀元、吉川広家、安国寺恵瓊ら毛利勢と、長宗我部盛親、長束正家が布陣していた。

一方、家康は十五日午前二時頃に西軍が関ヶ原方面へ向かった報せを受け取った。家康は諸将に関ヶ原へ急行するように命じ、東軍は午前三時から東山道を進軍した。二列縦隊

石田三成陣跡（撮影／筆者）

図１　通説の布陣図
『日本戦史・関原役』収載の図（付図第五号・関原本戦之図）より、著名な武将（部隊）に絞って簡略化し作図

で進み、左は福島正則、右は黒田長政が先頭となった。先頭は夜明け頃に関ヶ原に到着。依然として雨は降り続き、深い霧に閉ざされていた。

東軍は、西軍が関ヶ原の西一帯に展開していることを知ると、進軍を止めて霧が晴れるのを待った。家康は、野上（関ヶ原町野上）と関ヶ原の間にある桃配山に本陣を定めた。

三　開戦

午前八時頃、東軍の松平忠吉（家康四男）と井伊直政が三十ほどの騎兵を率いて陣を離れた。忠吉はこの戦いが初陣であったため、舅の直政（忠吉の正室は直政の娘）が補佐に当たっていた。

忠吉と直政は、先陣の福島正則隊の側面を抜けようとしたため、福島家臣・可児才蔵がこれを制止した。しかし、直政は「偵察である」と偽り、西軍の宇喜多秀家隊に向かってゆき、戦端を開いた。

徳川家康最初陣跡（撮影／筆者）

先陣は福島正則であったため、忠吉と直政の行為は抜け駆けとなる。抜け駆けは軍令で禁止されているタブーであった。忠吉と直政が戦端を開いたのを目の当たりにした福島正則は、東山道を進んで宇喜多隊を射撃した。

四　激戦

福島隊の銃声を聞いて、ほかの東軍諸隊も攻撃を開始した。藤堂高虎、京極高知、寺沢広高（正成）は大谷吉継隊を攻めた。大谷隊の前衛は、宇喜多隊が攻撃されたのを受けて藤古川を越えて前進し、藤堂・京極らの攻撃を防いで奮戦した。

織田有楽（長益）・長孝父子、古田重勝、猪子一時、佐久間安政・勝之兄弟、船越景直は、小西行長隊に向かった。

そして、田中吉政、細川忠興、加藤嘉明、金森長近（素玄）、黒田長政、竹中重門は、石田三成隊に向かった。

黒田長政は、関ヶ原の領主である竹中重門の先導で、北から迂回して石田隊の前衛・島清興（左近）隊の側面を突いた。さらに加藤嘉明と戸川達安も加勢したため、清興は負傷

して後退した。

黒田長政、細川忠興、加藤嘉明、田中吉政らは先を競って石田三成の本隊を攻撃し、一進一退となった。

島津勢の前衛（島津豊久）は泰然として動こうとせず、敵兵を待ち構える姿勢であった。三成の家臣・八十島助左衛門（やそじますけざえもん）が使者として助勢を頼みに（計二回）訪れるが、二回目の催促の時に馬上で使命を伝えたことを島津家臣に咎められて引き返している。その後、三成自身が助勢を頼みに訪れるが、豊久に「今日の戦闘は各隊がそれぞれに戦い、力を尽くそうではないか。とても前後左右のことをかまっている暇はない」と断られる。

五　家康、関ヶ原へ進軍

三成は、戦機の熟すのを見計らって狼煙（のろし）を上げ、松尾山の小早川秀秋、南宮山の毛利勢に出撃の合図をした。しかし、いずれも応じなかった。

南宮山では、開戦を知った長束正家と安国寺恵瓊が、毛利勢に出撃を促したが、毛利勢の前衛である吉川広家と福原広俊（ふくばらひろとし）は前日に東軍と不戦の密約を交わしていたため、動こう

とはしなかった。また、松尾山の小早川秀秋も東軍に内通しており、東軍に寝返る密約を交わしていた。

一方、家康は、南宮山に布陣している西軍が背面から攻撃して来ることを心配し、本多忠勝に相談した。そして、忠勝が「敵が依然として山上にいるのは内通が偽りではない証拠です。加えて、浅野幸長・池田輝政（照政）らが抑えてくれますので、憂う必要はありません」と答えると、午前九時を過ぎた頃に桃配山から関ヶ原へ進軍して士気を鼓舞した。忠勝は最前線に進出し、島津勢へ向かった。

午前十一時頃、家康は更に三、四百mほど前進し、史跡・徳川家康最後陣跡（関ヶ原町関ヶ原）まで進軍した（第四章112頁・図7参照）。史跡・決戦地（関ヶ原町関ヶ原）とは七百mしか離れていない最前線であり、まさに乾坤一擲である。これを受けて東軍諸隊も全力で西軍を攻撃したが、西軍の抵抗は強固であり、正午近くなっても勝敗はつかなかった。

徳川家康最後陣跡（撮影／筆者）

六　小早川秀秋の寝返り

東軍に寝返る密約を交わしているにもかかわらず、未だ寝返る気配のない小早川秀秋に対して業を煮やした家康は、「誘導の銃を放ち、向背を確かめよ」と命じ、徳川と福島の鉄砲隊が松尾山に向かって数発の一斉射撃をおこなった。秀秋は、東軍が自身に向かって銃撃したのを見ると、諸隊に西軍を攻撃するように命令し、松尾山を下りて大谷吉継隊に突入した。

吉継は、秀秋が東軍に内通していると見抜いていたため、この変事に驚くことなく、六百余の兵でこれを防いだ。そして、平塚為広と戸田勝成は小早川隊の側面を突いて、小早川隊を後退させた。

小早川隊は再び攻撃をおこなうが、この攻撃も平塚・戸田隊が奮戦して押し返した。しかし、藤堂高虎、京極高知、織田有楽らが、平塚・戸田隊を側面から攻撃した。

この時、藤堂高虎が、西軍の脇坂安治らに合図をすると、脇坂安治、小川祐忠、朽木元綱、赤座直保も東軍に寝返り、平塚・戸田隊に向かった。脇坂らも東軍に内通していたの

である。

脇坂らの寝返りによって、小早川隊が勢いを取り戻した。そして、三面から攻撃を受けることとなった平塚・戸田隊と大谷隊は壊滅した。平塚為広と戸田勝成は戦死、大谷吉継は自害した。

小早川秀秋の寝返りによって、西軍諸隊に動揺が走り、小西行長、次いで宇喜多秀家が敗走した。石田三成は、午後にも及んで激戦を繰り広げたが、小西・宇喜多の敗走を受けて崩れた。

島津勢も、島津豊久が一斉射撃で応戦するが、東軍の突入は止められず、半数以上が死傷した。そこで島津惟新は、敵中を突破して牧田から西南に逃げることに決め、全軍一団となって突進を始めた。福島正則、小早川秀秋、本多忠勝、井伊直政が、島津勢を追撃する。島津豊久は馬を返して奮戦するが、戦死。島津家臣・長寿院盛淳（ちょうじゅいんもりあつ）も、自ら「兵庫入道（ひょうごにゅうどう）（島津惟新）」を名乗って奮戦の末、戦死した。

一方、島津勢に追い打ちをかける松平忠吉と井伊直政も、島津勢の奮戦によって忠吉が負傷、直政も狙撃されて負傷する。その後、家康の追撃中止命令が下り、午後二時半に戦闘は終了した。

第七章　合戦の経過を検討する

一　両軍の移動について

第七章では、関ヶ原合戦〈以下、本戦と表記〉の経過を検討する。第三章、第五章、第六章では新説を否定してきたが、冒頭で触れたように、一斉射撃（誘鉄炮）によって小早川秀秋が寝返ったとする逸話を虚構とする以上、通説どおりで良いというわけにもいかない。一斉射撃の逸話を除いても成立する合戦像を提示する必要があるだろう。また、第六章で取り上げた白峰説が成り立たないことを再確認する上でも、開戦をはじめとした時刻の考察は必要となる。

第七章では『日本戦史・関原役』〈以下『日本戦史』と表記〉の内容を大きく六つに分け、それらを検討することで、本戦の経過を解明していきたい。

まず一点目として、『日本戦史』は、西軍は九月十四日午後七時に大垣城（大垣市郭町）を出発し、翌十五日の午前一時に石田三成が関ヶ原に到着。続いて島津惟新は午前四時に、その後、小西行長、宇喜多秀家の順に到着したとする。一方、東軍は午前三時から東山道（中山道）を西上し始め、先頭は夜明け頃に関ヶ原に到着したとする。まずは、これらの時

刻について考察していきたい。

第二章で述べたように、西軍が大垣城を発った時刻は、十四日の午後六時以降〜午後八時の間に収まる。また、東軍についても『藤堂家覚書』に「翌日十五日の未明に、いずれも青野を御発ちになって」とあり、青野ヶ原（大垣市青野町）に布陣していた豊臣系大名は十五日未明には関ヶ原へ移動を開始していた。

関ヶ原に到着した時刻については、当時十四歳で島津惟新に従っていた神戸久五郎の覚書に「九月十四日の夜に入ってから大垣を御出発、夜中に関ヶ原に御着になられました」とある。また、同じく島津惟新に従っていた大重平六の覚書には次のように記されている。

［史料14］

慶長五年九月十四日の晩六ツ下り（午後六時過ぎ）大垣を御出でになられ、関ヶ原へ向けて御出発されました。その夜は雨が降っておりました。こうして、夜の七ツ（午前四時頃）時分に関ヶ原に御着になられました。合戦の割り当ては一番鑓石田（三成）殿、二番中書（豊久）様、三番備前中納言（秀家）殿、その次が惟新様でした。そのほか大名衆方々も陣取なさいました。

島津豊久の隊に付属していた山田有栄（やまだ ありなが）の覚書『山田晏斎覚書（やまだ あんさい おぼえがき）』には「夜明け前に関ヶ原に御着になられました。布陣地について御考えになっていたところに、石田殿の備は陣を構えて隊を配置していました。その右へ一町半（約百六十四m）ほど間を空けて、こちらの軍は夜明けに布陣なさいました。中務（豊久）様の備です」と、豊久隊は夜明け前に関ヶ原に到着し、この時すでに三成は布陣しており、豊久隊も夜明けに布陣が完了したとする。

本戦のあった九月十五日は、太陽暦では十月二十一日にあたる。日の出は午前六時頃と考えていいだろう。島津惟新隊の関ヶ原到着は、神戸久五郎の覚書が「夜中」、『大重平六覚書』が夜の七ツ（午前四時頃）であるため、午前四時頃と考えられる。島津豊久隊も『山田晏斎覚書』に夜明け前（午前六時以前）とあるため、同様と思われる。島津勢はそれから約二時間で陣の構築を完了したと考えられる。

牧田（大垣市上石津町）を経由しての大垣城から史跡・石田三成陣跡（関ヶ原町関ヶ原）までの距離は約二十kmであり、雨天に軍勢での移動を考えると、十四日の午後七、八時頃に出立した島津勢が翌日午前四時頃に関ヶ原に到着し、午前六時頃に布陣を完了したというのは、現実的な数字である。島津勢に遅れて到着した隊も午前七時までには布陣を完了し

たと推測できよう。

なお、彦坂元正と石川康通が、九月十七日付けで松平家乗に宛てた書状（第六章142頁［史料9］参照）には、西軍が大垣城を発つ際に外曲輪を焼き払ったと記されているが、この記述には疑問が生じる。西軍の関ヶ原転進は、牧田を経由する迂回路を通っている。早期に東軍に気付かれた場合、先に関ヶ原に到達できるのは垂井（岐阜県垂井町）を押さえている東軍である。東軍が先に関ヶ原を押さえた場合、三成らに勝ち目はないだろう。外曲輪を焼き払うという注意を引くような行動をとったとは考え難い。『藤堂家覚書』の記述をみても、東軍が十四日の内に西軍の関ヶ原転進を知ったようには思えない。

島津惟新に従って本戦に参加した帖佐宗光の覚書（第四章109頁［史料8］参照）には、火を付けた火縄を挟んだ竹を沢山立てて陣に人がいるように偽装したとあるように、こちらが真相と考えられる。無論、大垣城が所領三万石の伊藤盛正の居城であることを踏まえると、宇喜多秀家や三成らが率いた兵を全て収容するために外曲輪を拡張したとしても不思議はなく、大垣を離れるにあたって防御面積の縮小のために焼却された可能性は有り得る。しかし、その場合でも三成らの関ヶ原への移動が完了した後に大垣城守将の福原長堯らの手によっておこなわれたと考えられる。

二　井伊直政の抜け駆けについて

続いて二点目として、『日本戦史』は、午前七時を過ぎても戦闘は開始されず、午前八時頃に松平（まつだいら）忠吉（ただよし）と井伊（いい）直政（なおまさ）が宇喜多隊に向かい、戦端を開いたとする。

まず、戦端を開いたのが忠吉と直政という点は、九月十七日付け彦坂元正・石川康通連署状に「この地の衆、井兵少（直政）また福島（正則）殿が先陣となり、そのほかの者も悉（ことごと）く続いた」と、井伊直政が福島正則（ふくしまさのり）とともに「先陣」として扱われているので、通説どおりでいいだろう。

文中にある「この地の衆」の解釈については、この書状が記された時、彦坂元正と石川康通は佐和山（さわやま）城（滋賀県彦根市）の番手に当たっているため、素直に読むと近江国の領主と解釈できるが、（本戦当時）近江が西軍の勢力圏であったことを踏まえると考え難い。本戦に勝利した後、近江国に入っていた東軍主力の面々と考えるのが妥当であろう。全体の解釈は「（現在）この地にいる井伊直政と福島正則が先手となり、そのほかの者も悉く続いた」となる。

先陣は福島正則であったため、松平忠吉と井伊直政の行為は抜け駆けとなる。抜け駆けは軍令で禁止されている行為であり、たとえ手柄を立てたとしても処罰の対象となる。にもかかわらず、忠吉と直政が抜け駆けをおこなったのは、徳川氏が抱える事情を踏まえてのことであった。

榊原康政、大久保忠隣、酒井家次ら大身家臣が多く編制された徳川軍主力は徳川秀忠が率いていたが、未だ美濃国に到着していなかった。

そのため、関ヶ原には備（部隊）を構成して前線で戦える重臣は、忠吉、直政、本多忠勝しかいなかった。その兵力の割合は、東軍の前線部隊の約五分の一であり、そのほかは豊臣系大名であった。

ゆえに直政は、先陣を切ることで徳川家中の面目を施そうとしたのであろう。結果的に東軍の完勝で終結しながらも、徳川家臣の村越兵庫と、旧臣の奥平貞治が戦死。松平忠吉と井伊直政が負傷。戦場で傷を負うことがなかったとされる本多忠勝でさえ、名馬・三国黒を被弾で失っている。徳川氏の関係者に死傷者が目立つのは、こうした引け目が背景としてあったのかもしれない。

直政の抜け駆けについては、一次史料から確認できないことを理由として実在を疑問視

されることがあるが、彦坂元正・石川康通連署状から、直政が「先陣」として評価されていたことは間違いない。

仮に抜け駆けが後世の創作であった場合、正規に「先陣」だったにもかかわらず、あえて抜け駆けを犯した話を付け加えたことになる。これにはデメリットしかない。規律によって社会を維持しようとしていた江戸時代において、そのようなことをするであろうか。

彦坂元正・石川康通連署状において、福島正則の「先陣」は侵されておらず、直政の「先陣」と併存している点は重要である。直政の抜け駆けは実在したが、直政は抜け駆けの主役に忠吉を立てたと考えられる。正則にしてみれば、家康の子息が初陣である上に、傷を負ってまで挙げた武功を非難することは困難であろう。また、直政の「先陣」は抜け駆けであったため、正則の「先陣」は侵されずに、依然として「先陣」と評価されたと考えられる。こうした配慮をもって、徳川方は正則との衝突を回避したと思われる。

三　開戦時刻

次に開戦時刻であるが、彦坂元正・石川康通連署状は「十五日の巳の刻、関ヶ原に差し

掛かり、一戦なさいました」と、開戦は巳の刻（午前十時頃）であったとする。また、豊国社の神龍院梵舜の日記『舜旧記』にも「巳の刻」の記述がある。

そして、島津家中の某覚書にも「翌十五日の巳の刻ごろ、朝霧の絶間から幟と思しき物が見えたと報告があり、各々が見に行ったところ、思った通り、関東の大軍勢数万騎が見えました。この大軍勢が次第に近づいて来て、惟新様の御備から東にある備前中納言（秀家）の備に攻め掛かり、合戦となったところ、備前中納言殿の備は敗れました」と、巳の刻ごろに東軍が宇喜多隊に攻め掛かったとある。しかし、その直後に宇喜多隊の壊滅が記されており、開戦時刻ではなく、東軍が総力を挙げて突撃した時刻を示している可能性がある。また、秀秋の寝返りと大谷隊の壊滅が宇喜多隊の壊滅の後に記されており、某覚書には時系列の前後がみられる。

また『関ヶ原御合戦双紙』には、「次第に巳の刻ごろに空が晴れて視界が良くなった。その時、沢井左衛門尉（雄重）、祖父江法斎、森勘解由、奥平藤兵衛（貞治）が物見に出たところ、敵に遭遇して戦い、勇ましい功名を立てた」とある。後年に生駒利豊が本戦の様子を記した書状からも、『関ヶ原御合戦双紙』と同様に沢井雄重らが福島正則に属して宇喜多隊と戦っていたことが確認できる（第四章96頁［史料6］参照）。そして『関ヶ原御合戦双

紙』の記述は、島津家中の某覚書の記述と類似している。

一方、『関原始末記』は「辰の刻に合戦始て」とし、『寛永諸家系図伝』脇坂安治の項も「九月十五日辰の刻の一戦」と、開戦は辰の刻（午前八時頃）であったとする。

辰の刻と巳の刻の間とする記録もあり、『山田晏斎覚書』は「十五日、早朝に後備は内府（家康）勢まで攻め掛かると申して来ました。一戦は辰巳の間だったでしょう。雨天のため霧が深くて、細々とは見えませんでした」とし、山田有栄に従って戦った黒木左近兵衛の申分も同様に「関ヶ原合戦、慶長五年九月十五日辰巳の刻の間にあったでしょう。雨天のため霧が深くて、方々を見ることができませんでした」と、雨が降り、霧が深い中で戦闘があったとする。

さらに、帖佐宗光の覚書は「家康卿は十四日の昼に大垣（赤坂）に到着され、十五日の未明に石田の軍を破るために一戦に及びました」とし、十月七日付けで池田輝政が本多正純に宛てた書状にも「九月十四日の夜、大谷刑部少（吉継）が陣取に着いたところ、明十五日の未明に（家康は）御一戦を御命じになり」とある（『士林泝洄』）。また、伊達政宗も九月三十日付けで家臣たちに宛てた書状で「大垣に籠城していた衆は夜中に紛れて、美濃国の山中（関ヶ原町山中）という所へ移動し、陣取ったのを、十五日未明に、ひたすら攻め

掛かって押し崩し」と、未明に開戦したとする（『留守家文書』）。

また、神戸久五郎の覚書は「夜が明けると、東国衆は大谷刑部殿の陣に攻撃を仕掛けました」と、夜明けに東軍が大谷吉継の陣に攻め掛かったとする。

史料によって時刻は様々であるが、これらを総合して先ず言えることは、当日は雨が降り、霧が深かったが、巳の刻（午前十時頃）には天候が好転し、霧も晴れてゆき視界が良くなっていったという状況と、天候が好転する以前から戦闘があったことである。

そして、この問題を考える上で笠谷和比古氏の「当時の合戦において、明け方までに両軍の布陣が完了しておきながら、昼近くの十時になって漸く開戦するなどということは先ずないことである。当時の合戦における基本形は、両軍がともに布陣を完了していたという状態の下では、早朝、払暁（卯の刻）とともに戦闘が開始される。そして夕方、いわゆる逢魔が時の頃になると戦闘を停止するというものであった」とする指摘は重要である（笠谷：二〇二二）。

無論、当日は霧が深く、笠谷氏が述べる合戦のセオリーをそのまま当てはめることは出来ないが、『藤堂家覚書』では、藤堂高虎の家臣・藤堂良勝が朝駆けをおこない、諸軍の中で一番首を挙げたとする（第四章105頁［史料7］参照）。藤堂良勝のように功名を立てよ

うとする者が少なからずいるなか、霧が晴れる巳の刻まで静寂を保つのは不可能といえよう。

開戦時刻を述べた史料の中で、本戦当事者（あるいは参戦した家）に絞ると次の通りである（某覚書は証言者を特定できないため除く）。

①「未明」は、島津惟新の家臣と、池田輝政。

②「夜明け」は、島津惟新の家臣。

③「辰の刻」は、脇坂氏。

④「辰の刻と巳の刻の間」は、島津豊久に付属した者。

島津惟新に従った者の覚書は、史料によって記述が様々であるが、島津豊久に付属した者は「辰の刻と巳の刻の間」で一致する。島津惟新に従った者たちの記述が異なる理由は明確にはわからない。惟新の布陣地が石田三成の陣の西に位置し、諸将に比べて後方にある点や、『大重平六覚書』に「合戦の割り当ては一番鑓石田殿、二番中書（豊久）様、三番備前中納言（秀家）殿、その次が惟新様でした」とあるように、西軍内部の取り決めにおいても、惟新は三番鑓の秀家に続く後方の担当であり、あらゆる面で交戦場と離れていた点が影響したと思われる。

これに対して、石田三成の陣の南西に位置し、二番鑓とされた島津豊久に付属した者は「辰の刻と巳の刻の間」と述べており、大関（おおせき）（通説では藤下）に布陣した脇坂氏は「辰の刻」としている。前線に位置した者（家）が伝える時刻ほど、辰の刻（午前八時頃）に近づく傾向にある。

情報源が伝聞である一次史料は、「未明」とする伊達政宗書状、「巳の刻」とする彦坂元正・石川康通連署状と、『舜旧記』がある。

「巳の刻」とする記録は、情報源が伝聞であるものが多い。一方で本戦当事者が示す時刻は、「辰の刻」前後に集中している。これは全体的な認識としては「巳の刻」であり、戦闘を目の当たりにした当事者にとっては「辰の刻」前後であったということであろう。当日は霧が深く、巳の刻（午前十時頃）になって晴れてきたことを踏まえると、巳の刻より前に総力を挙げた突撃があったとは考え難く、後方にいる諸隊は戦闘に参加せず、前線にいる隊が慎重に進みながら攻撃を掛けたと考えられる。戦闘が開始されたのは「辰の刻」あるいは「辰の刻と巳の刻の間」であろう。

「未明」を示す史料もあるが、笠谷氏が述べる合戦のセオリーには当てはまらず、さらに霧が深かったことを踏まえると、戦闘をおこなうのは難しいと考えられる。史跡・徳川家

康岡山本陣跡（大垣市赤坂町）から史跡・関ケ原宿本陣跡（関ケ原町関ケ原）までの距離は約十一㎞であり、軍勢での移動を考えると三時間は要すると考えられる。未明の内に、東軍諸隊が布陣を完了させ、さらに攻撃を仕掛けるに至るのは難しいだろう。理論上、未明に戦闘があったとは考え難い。霧が深く、日が射しにくいことが影響して「未明」と誤認した可能性が考えられる。

また、池田輝政は南宮山（なんぐうさん）の抑えであり、開戦時に関ヶ原にいなかった。家康も布陣地は野上（のがみ）（関ケ原町野上）と関ヶ原の間であることから、関ヶ原にはいない。開戦時に家康の号令があったわけではなく、諸将の裁量によって開戦の火蓋が切られたといえる。つまり、東軍側の記録では、家康が関ヶ原への移動を命じた時を以て開戦の号令と位置づけて、「明十五日の未明に御一戦を御命じになり」となった可能性も考えられる。

四　家康による乾坤一擲の前進

続いて三点目として、『日本戦史』は、九時過ぎ頃に家康は桃配山から関ヶ原へ進軍して士気を鼓舞。十一時頃には更に三、四丁（三、四百m）前進したとする。

この家康による乾坤一擲ともいえる前進は、一次史料はもとより、『関ヶ原御合戦双紙』や『関原始末記』からも確認することはできない。『関ヶ原御合戦双紙』は執筆当時から周囲の関心を引いており、『関原始末記』は酒井忠勝の命で編纂されている。これら、家康への配慮を多分に求められる背景で作られた史料が、家康の見せ場を書き漏らすとは考え難い。このことは、逸話が事実ではなく、後世の創作であることを示していよう。

逸話に関する記述の初見は、寛文三年（一六六三）成立の『慶長軍記』であり、「巳の刻に晴となって、東西は初めて玲瓏となった。旭が東に輝いて西に光を射した。（家康の）本陣は魚鱗の陣で備られ、先鋒の衆は鶴翼の陣となった。その後、旗本は関ケ原町口東から西へ拾二町前進し、また、酒井左衛門に命じて、金扇の御馬印ならびに白旗を、御本陣より九町ほど御先へ出された」と、手勢や馬印を前進させたとある。

延宝元年（一六七三）成立の『武家事紀』にも「戦の半ばに、源君（家康）馬廻の勇士が一同に駆け入って戦った」と記されている。

また、家康は伊達政宗に次の書状を送っており（『伊達家文書』）、石川家成にも同じ内容の書状を送っている（『松平義行氏所蔵文書』）。

［史料15］

今月十五日の午の刻（正午頃）、美濃国の山中において一戦におよび、備前中納言（秀家）、島津（惟新）、小西（行長）、石治部（三成）の軍勢を悉く討ち取りました。すぐに佐和山まで、今日中に着馬します。大垣も今日中に攻略します。御安心ください。その表のこと、（政宗の）処置は尤もです。恐々謹言。

九月十五日　　家康（花押）

大崎少将殿

内容から本戦に勝利した直後に記したことがわかる。文面を素直に読むと開戦時刻は午の刻（正午頃）となるが、それは考えられないため、自ずと午の刻は西軍を壊滅させた時刻と捉えられる。

しかし、家康が野上と関ヶ原の間の地点に布陣していたことを踏まえると、午の刻は家康が関ヶ原に入った時刻を指す可能性が出てくる。『山田晏斎覚書』には「こうしたところに、内府様の備（部隊）が、こちらが通る道筋に向かって御出でになったので、一大事であると思ったが、佐和山に通じる街道の方を御通りになったので、別条なかった」と、退

却する島津惟新の供をしていた山田有栄が、家康の本隊と遭遇したとあるので、この頃には家康が関ヶ原に入っていたことが確認されている。また、家康の本隊にいた小栗忠政が島津の騎兵を討ち取っているので、家康本隊と島津勢との間に多少の戦闘があったと考えられる（『寛永伝』）。

『山田晏斎覚書』によると、家康の本隊は「御出で」「御通り」とあるので、家康が午の刻に関ヶ原に入った可能性は高い。後述するが、西軍が壊滅するのは正午頃であるため、家康の関ヶ原への進軍は、戦局が有利になった後のこととなり、乾坤一擲の前進ではない。

五　西軍の壊滅

続いて四点目として、『日本戦史』は、島津勢の前衛（島津豊久）は泰然として動こうとせず、敵兵を待ち構える姿勢であったとする。そして、石田家臣・八十島助左衛門が使者として後続の助勢を頼みに二度訪れるが、二回目の催促の時に馬上で使命を伝えたことを島津家臣に咎められる。その後、三成自身が助勢を頼みに訪れるが、豊久に断られたとする。

また五点目として、『日本戦史』は、石田三成隊は奮戦し、午後に至っても勝敗はつかなかったが、宇喜多秀家と小西行長の敗走を受けて崩れたとする。これらを併せて検討していきたい。

豊久が敵を待ち構える姿勢であったことは第四章で述べたとおりである。八十島助左衛門が助勢を求めた際の遣り取りは、『山田晏斎覚書』に次のように記されている。

［史料16］

石田殿は八十島助左衛門殿を使者として「（石田隊が）敵勢に攻め掛かるので、後から攻め掛かって欲しい」と仰せられました。（豊久は）「委細、承知した」と御返事になりました。（再び）八十島殿が使に参りました。この時は、こちらの備の中から「馬上から口上を述べるなど無礼なことだ。討ち取れ」などと口々に喚（わめ）き立てたので、（八十島は）すぐに駆け戻りました。続いて石田殿自身が出向いて「（石田隊が）敵勢に攻め掛かるので、後から攻め掛かって欲しい」と言いました。中務（豊久）様は御返事として「今日の戦闘は各隊がそれぞれ、力を尽くして戦おうではないか。御方（三成）もその通りに御心得いただきたい」と直に仰せられたので、（三成は）「武運を祈る」と

仰せられ、自身の備えに帰着する途中と思われる時に、はらはらと（石田隊は）敗軍しました。

内容は大方『日本戦史』の通りである。八十島助左衛門が後続の助勢を依頼したことは、島津豊久隊が積極的に打って出ていないことを物語っている。また、『山田晏斎覚書』には「一戦前に大谷（吉継）殿の陣を筑前中納言（秀秋）殿が攻め破った」ともあり、豊久は西軍内部の取り決めで二番鑓とされていたが、大谷隊が壊滅した頃も静観していたことがわかる。

帖佐宗光の覚書には「石田隊は皆、陣を破られて敗北しました。午の刻のことでしたでしょうか、こちら（惟新）の陣を敵が四方から取り囲んで、激しく攻めてきました」とあるため、石田隊の壊滅および、島津惟新隊に東軍が攻め込んだのは正午頃といえる。

三成隊の壊滅が正午頃であるのは、［史料16］からも裏付けられる。山田有栄は、三成が自陣に戻る途中の頃に三成隊は壊滅したと認識している。三成から豊久に助勢を催促したのは計三回であり、また、霧が深い間は反攻に出にくいことを踏まえると、帖佐宗光の覚書（第四章109頁［史料8］参照）にある島清興（しまきよおき）の善戦は霧が晴れた午前十時以降と思わ

れる。島清興の善戦を受けて三成が八十島助左衛門を派遣したのが午前十時半と仮定し、その後、動く気配のない豊久に対して再び八十島を派遣したのが午前十一時、八十島が非礼を咎められたことを知った三成が自ら豊久の陣へ向かうのが午前十一時半と仮定すると、三成が自陣に戻るのは正午頃となる。あくまで推測だが、時間の計算は合う。『関原始末記』にも「午の刻に及て敵軍のこらす敗北す」とある。

神戸久五郎の覚書は「上の山から筑前中納言は白旗を挿させた軍勢を率いて参戦し、大谷（吉継）殿の兵を一人も残らず討ち取った。備前中納言（秀家）殿の陣へは新手の大将が攻め掛かって追い崩し、こちら（惟新）の陣へ攻め掛かった。東は別の手の大将が攻め掛かって石田（三成）殿の陣を追い崩し、こちら（惟新）の陣へ攻め掛かった」と、大谷隊が壊滅したことによって、宇喜多秀家隊の攻撃に新手が加わって宇喜多隊を破り、さらに石田隊にも別の部隊が攻撃を加えて破り、宇喜多隊と石田隊を破った東軍諸隊が双方向から惟新隊に攻め込んだとする。

大谷隊を破った後、これまで大谷隊と戦っていた東軍諸隊は、二手に分かれて宇喜多隊と石田隊の攻撃に加わったのである。『日本戦史』が記すように西軍諸隊は南から順に崩されたわけではなく、宇喜多隊と石田隊は同時期に崩れたといえる。

つぎに挙げるのは、『大重平六覚書』の記述である。

［史料17］

石田殿は一時（いっとき）も持ち堪（こた）えられずに、中書（豊久）様の陣場へ崩れかかったところ、中書様は少し持ち堪えなさった。惟新様は未だ鎧もお召しになっていなかったが、もはや、良い頃合いなので、鎧をお召しになると（惟新が）仰せられたので支度をいたしました。鎧を曽木五兵衛殿が着せました。中納言（秀秋）殿が裏切り、大谷刑部少輔（吉継）殿へ攻め掛かりました。大谷殿は持ち堪えて押し返しましたが、中納言殿も押し返したので、大谷殿は持ち堪えられず崩れました。

石田隊は一時（約二時間）も持ちこたえられず壊滅したとある。開戦時刻は「辰の刻」あるいは「辰の刻と巳の刻の間」であるため、午前十時あるいは十一時以前に壊滅したことになるが、「一時もこたへす」は、あくまで大重平六の感覚と記憶によるものであるため、深く考える必要はないだろう。石田隊の壊滅の後に秀秋の寝返りが記されているように、時系列が前後している箇所もみられる。

『大重平六覚書』の記述で興味深いのは、島津惟新が三成や豊久が壊滅する直前まで鎧を着用していなかった点である。惟新隊が敵中突破をおこなう直前まで戦闘に参加していなかったことが窺えるとともに、六十六歳での参戦はかなりの負担があった様子が窺える。

惟新が後年に記した『惟新公御自記』にも「引き退きたいが、老武者であるため、伊吹山の大山を越え難し。たとえ討たれようとも、敵に向かって死ぬべきだと思い、本道に乗り、向かう者を討ち果たし追い散らし」とあり、老軀をおして参戦した様子が伝わってくる。

『慶長年中卜斎記』や『関原始末記』、『武家事紀』は、井伊直政は島津惟新を追撃中に狙撃されたとし、『井伊家慶長記』も同様であるが、帖佐宗光の覚書（第四章１０９頁［史料8］参照）では敵中突破の前に狙撃されており、直政が撃たれた動揺を突いて島津勢は敵中突破をおこなっている。

『関ヶ原御合戦双紙』には「（忠吉は）井侍従（直政）を伴われ、諸共に攻め掛かり、戦って、疵を受け、比類なき働きなり」と、松平忠吉と直政が共に攻撃を仕掛けて負傷したことしか記されておらず、追撃中というよりは正面攻撃で負傷したような印象である。帖佐宗光の覚書の記述が正しい可能性は十分にある。

また『山田晏斎覚書』は、惟新隊が家康の本隊を横切った後は「敵勢は薄くなり、（惟新

は）駒野（岐阜県海津市）へ御出になった」としており、関ヶ原を抜けた後は、通説ほど猛追撃は受けていないと思われる。

六　小早川秀秋の寝返り

最後に六点目として、小早川秀秋が松尾山（関ヶ原町松尾）を下りて大谷隊を攻撃した時刻を考察したい。大関（関ヶ原町松尾）には宇喜多秀家や大谷吉継ら西軍諸将が布陣しており、東軍が猛攻を加える前に寝返ることは秀秋の孤立を意味する。霧が晴れる前に行動を起こすことはないだろう。

また第六章で述べたように、一進一退の攻防が続いた後に秀秋の寝返りがあった点を踏まえると、午前十時以降であることは確実である。

松尾山は標高二九三mであり、史跡・小早川秀秋陣跡となっている山頂の主郭（本丸）から麓まで下りるには約三十分かかる。そして、松尾山の麓から藤下（関ヶ原町藤下）を経由して史跡・不破の関跡（関ヶ原町松尾）までの距離は、約千三百mある。

昨夜から今朝にかけて一変した関ヶ原の状況（両軍の布陣）を霧が晴れた午前十時から把

握し、その上で攻撃対象を決定して、松尾山を下りる過程を経れば、大関の大谷隊を攻撃した時には午前十一時頃に至っていよう。

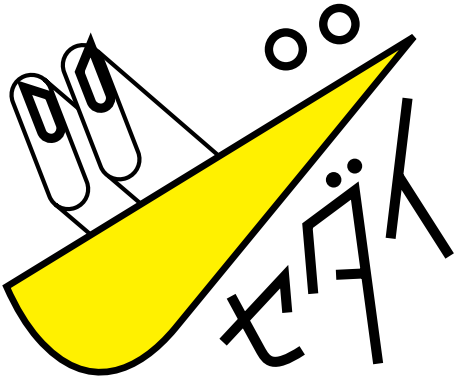
［史料17］によれば大谷隊は一度、小早川隊を押し返しているので、大谷隊の壊滅は午前十一時二十分頃と考えられる。大谷隊を破った東軍諸隊が宇喜多隊と石田隊の攻撃に加わり、正午頃に宇喜多隊と石田隊は壊滅したという流れとなる。

軍記には、秀秋が松尾山を下りて大谷隊を攻撃した時刻は記されていない。その影響か『日本戦史』も明確に秀秋の寝返りの時刻を記していないが、文脈から正午頃としていると考えられる。秀秋の寝返りは通説より約一時間早い。

では、一斉射撃によって秀秋が寝返ったとする逸話が虚構にもかかわらず、寝返りが開戦と同時ではないとするならば、切っ掛けは何に求められるのであろうか。『戸田左門覚書』には、東軍の先陣・福島正則隊の鬨の声に呼応して秀秋は寝返る手筈となっていたが、福島隊が鬨の声を上げても秀秋は動かなかった。原因は、福島隊が軍の配置を変更していたことや、霧が深くて敵味方が不分明であったためであり、霧が晴れた後、秀秋は松尾山から西軍に攻めかかったとある。

『戸田左門覚書』は、第四章で信憑性は高くないと指摘した史料であるが、秀秋が動かな

かった原因を霧に求める点は状況と矛盾していない。秀秋に日和見の考えはなかったとしても、寝返りをおこなう好機を判断するには霧が晴れるという条件が必要であり、そこから行動を開始すれば自ずと時間は経過しているのである。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!